



緑西LETTER

vol. 7

緑西直言



「いつも心に兵庫医大を」

西宮回生病院

院長 福西 成男 (S63年卒)

S63年卒業でサッカー部OBの福西です。4月から西宮浜の西宮回生病院に院長として勤務することになり緑西会の一員とならせていただきました。

“いつも心に兵庫医大を！” タイトルはいかにも愛校心溢れるタイトルになっていますが…

実はさかのぼること38年前奈良の田舎の公立高校を卒業して兵庫県西宮市にやってきた福西少年は都会と私立医大の水が合いませんでした。いつもちょっとすかした感じで斜めから同級生や先輩達を見ていたようです。大学生の大好きな合コンやパーティーにも行きまくりましたが、それほど好きになれず、大好きなサッカーも〈高校で引退〉と勝手に決めて兵庫医大では入部しませんでした。医者になる！という強い志を持って入学したわけでもなく〈なんとなく西宮にやってきた〉という感じでした。

しかし医学部の6年間はすごく長く特殊で、中学+高校の6年間と違って全く同じメンバーの約100人(先輩後輩を入れると常時600人)が同じ目標へ向かって過ごす日々はすごく貴重で、すかしていた福西少年にもたくさんの友人、先輩後輩ができました。

卒業の頃には兵庫医大のことが少しずつ好きになりつつありました。サッカーも結局あきらめきれず、当時は超弱小だったサッカー部に同級生より2ヶ月遅れで入部しました。そして遅れて入部したのに1年の西医体が終わった後に1年生なのにキャプテンになるはめになりました。大学でサッカーを始めた初心者の後輩達と共になんとか勝てるチームに！と努力するうちに、すかしていた福西少年も高校時代の青春を再び取り戻すことに成功しました。38年経った今も“何か兵庫医大のサッカー部のお役に立

てれば”と思いつつ、強豪チームに成長した今の学生の試合を見るたびに熱い思いがこみ上げてきます。一方で、卒業当時は医者の仕事というものにあまり興味がなく、仲の良かった同級生や先輩に誘われるまま整形外科に入局したのがS63年でした。

当時の整形外科では、“働き方改革”とは真逆の“厳しく過酷な労働”が待っていました。向学心はありませんでしたが、体力と忍耐力には自信があり淡々と業務をこなす日々でした。それなりに楽しみながら整形外科医としての自信もついてきましたが、それほど医局に対する愛着はまだありませんでしたが、入局後16年たったH16年に医局長をすることになりました。いわゆる医局の雑用係で、結局7年間やることになりましたが、ここが転機になりました。毎日医局や医局員のことを考えているうちに“趣味が医局”みたいな感じになっていきました。最終的には兵庫医大整形外科教室や自分の置かれている環境が好きすぎて、当時新しい研修医制度が始まった頃でしたが、研修医を整形外科に勧誘する際に自分のこの〈変態な感情〉を人に押し付けるような気がして…逆に勧められなくなってしまいました。

そして今西宮回生病院にいます。ありがたいことに、退職された吉矢教授を筆頭に教室の7人の同僚とともに、今まで大学で行なってきた診療の環境と同等の(実はそれよりかなりいい?)環境で自分の専門分野である股関節や人工関節の診療に携わることができています。

これまで大学病院で働いた期間が長く〈地域医療〉という言葉の意味さえもよくわかっていませんが、きっとこれまでの自分の経緯から今度は西宮地域と回生病院が大好きになるのかなあ?と思っています。

これまでを振り返って-過去、現在、未来

明和病院病理診断科
部長 覚野 綾子 (H2卒)

緑西会の皆さまへ

こんにちは。覚野綾子と申します。本日はこのような立派な同窓会誌に私の昔話をご掲載頂きましてありがとうございます。チョッと懐かしくチョッと笑えるお話をしたいと存じます。

私は兵庫医科大学を平成2年に卒業後すぐ第2内科に入局させていただきました。当時の垣下榮三教授は永井清保教授の次期教授1年目で私達は初の研修医でした。合計9名入局させていただきました、とても喜んで頂いたのをよく覚えております。研修医は厳しくそして暖かく育てて頂き、教授外来の際にシュライバーで付かせていただき、勉強させていただきました。私は内科研修の後病理をやりたいと思っておりましたが申し訳なくそれを言うことはできませんでした。大江与喜子先生は第2内科の大先輩に当たり、「オニユリ会」(後にアジサイ会)で私達女性研修医を励ましてくださいました。9名中7名が女医で同期は多かったですが、第2内科の女医先生が全員集まるととても迫力があり、仕事と家庭を両立させておられてそれでいて美しく、たじたじだったのを思い出します。先日兵庫医大に講義に参りますと同期の福渡(柳ヶ瀬)恵先生のお嬢様が2年生におられ、なんと成績トップとのことでした。堀和敏先生のご子息もおられました。同期の2代目が兵庫医大でたくさん学んでおられ、清水聡一郎、聖保先生、岡田昌也先生、竹谷哲先生、橘良哉先生のご子弟もおられます。

皆さん良いご両親になっておられます。第2内科のオーベンは消化器の大歳健一先生で当時流行していたマンガ「ちびまるこちゃん」に似ていた所為か、「まるちゃん」と呼ばれていました。血液内科の先生方は病棟でずっと研修医と討論されて

おられたためチョッとうらやましかったのを覚えております。消化器の先生は胃カメラ、肝生検等の検査や治療に走り回っておられ、病棟に来て下さるのは夕方でした。「まるちゃん、あれはできてる?」とこられるとなにか忘れていないか…、と戦々恐々としていたのを思い出します。当時は金丸昭久先生が回診の際に決めて頂いた化学療法メニューや抗生剤の種類に従い、研修医が採血、点滴、骨髄穿刺、輸血それからムンテラ(今はICと言っています)まで行っていました。白血病の告知等はせずご家族に「〇〇さんのところへ行く前に病棟にお越しください」と言ってご家族にのみ告知していました。患者様には「貧血の治療頑張りましょうね」と言って。でもすぐに隣のベッドの患者様が「赤いお薬、青いお薬を注射しているから白血病だよ」と告知してくれました。そんな折学生気分抜けの研修医の人生を揺るがす大きな出会いがありました。32歳、女性。MDSに対する骨髄移植後の患者様で、肺炎が急激に進行しようとう気管内挿管の上呼吸管理することになりました。当時気管内挿管しても感染症の経過が急激なため抜管できないことがほとんどでした。オーベンと来る日も来る日も動脈血を採血し少しずつ酸素を減らして行きとうとう抜管する日がやってきました。抜管後まず一言目が「おなか空いた」でした。その次の日から呼吸リハビリや体のリハビリと大忙しでした。ご家族が遠方にも拘らず付きっきりで看病されその愛情のお陰で蘇ったのだな、としみじみと思いました。いまでもその方と年賀状で連絡合っています。昨年定年退職されたそうです。3年目は明和病院で研修させていただきました。上原哲史先生がオーベンでした。名誉院長の森俊雄先生が内科医として大活躍されておられました。胃カメラ、胃透視、超音波等を学ばせて頂きました。血液内科では一生見ることのできなかった急性心筋梗塞患者様の受け持ちをさせていただきました。ある日胃カメラをさせていただいていると技師さんが心電図を採ってくだ

さっていて「急性心筋梗塞です」と連絡が入りました。その日のうちにSwan-Ganz カテーテルを挿入させていただき、肺動脈楔入圧、動脈血液ガスとの戦いでした。Day14となり酵素も低下しリハビリも順調に進みいよいよ退院かなと考えていた日に突然急変しなくなりました。森先生が病理解剖してくださるとのことをお願いしてみましたがどうしても無理とのことでした。4年目からは兵庫医大第1病理に入局させていただきました。岩田信生先生にご相談すると体が動くうちに内科をやっておくほうが良い、というアドバイスを頂きました。岩田先生はとても器用でずっと病理をやっておられたのに30歳代後半から研修医になられ採血や胃カメラ、超音波等をすぐにマスターされておられました。病理では8年ぶりに新人が入ったとのことでした。最初は歓迎ムードでしたが、だんだん慣れてくると見向きもされなくなりました。また大学院生で2年前に入っておられた藤島宣之先生は外科医でしたのですぐに病理診断ができ、病理解剖も器用で早く私とは全く異なり優秀な先輩でした。そんな折、阪神・淡路大震災が起きました。兵庫医大とは別の病院で当直していた私は訪れた患者様の処置をしようとしたのですが停電して真っ暗でした。額から血を流した患者様が懐中電灯で顔を照らしてくださる姿に「キャー」というわけにもいかず慣れない縫合をしました。そしてその年に寺田信行教授がお越しになられ、病理診断に加えて学位取得のための研究、実験と目まぐるしく日々の生活は180°転換し、苦しいけれどもやりがいのある生活が始まりました。癌の骨髄転移の研究や、c-kit欠損マウス、ラットを使わせていただき肝線維化の研究をさせていただきました。

その際に一瞬遅れていれば雑誌に通っていなかった論文をなんとか通していただき、研究結果の出し方の難しさとスリルを身を持って知りました。寺田先生には「どんな結果が出ようが必ず論文に仕上げ世の中に出して見せる」という心意気があり、私には到底無理と思い知りました。実験病理よりいくらでも仕事が舞い込んでくる人体病理にどっぷりと

つかっている今日この頃です。でもAIのお陰でもうすぐとても楽になるのではないかと期待しています。平成15年からは明和病院に単独乗り込んで一人病理医としてやっております。やはり一人でやっていると思いきや苦手分野がありますのでできるだけ一人で抱え込まずコンサルトするように心がけています。平成23年に東日本大震災が起きました。その前年の年末に安井智明先生が手術を受けておられました。安井先生はいつも忙しくご自分の検診を受けようとする電話がかかってきてまた服を着て走っていくという生活でした。でも私達との約束は必ず守ってくださり、「切り出しに来てください」と頼むとどんなことをしても必ずやってきて「包丁1本、さらしにまいて」と歌いながら臍臓を見事に薄く切ってくださいました。

その年の学会にも必ず付いて行ってやるから発表しろ、と言ってくださいました。でもその約束は果たされることはありませんでした。安井先生の棺に学会発表のポスターを入れさせていただきました。大江先生は地震で亡くなった人々を治療するために神様に呼ばれたのよ、と慰めてくださいましたがそんな遠くに行かず私達のそばで御指導していただきたかったと思います。東日本大震災の3カ月後、学会が岩手県盛岡市で開催され、その際に「三陸鉄道フロントライン研修会」に参加させていただきました。岩手県宮古市田老まで車で3時間辿りついたころにはもう夕方でした。翌日田老診療所や東北きつての観光名所、浄土ヶ浜を見学させていただきました。診療所は水浸しで検査機器は泥だらけ、検査室に大木が倒れて突き刺さっておりました。それよりも院内の患者様、一般の方々の尊い命が津波の所為で失われたということが本当にショックでした。陸中山田では魚の腐った生臭い匂いとともにも駅舎の時計が15:46を指したまま止まっているのがとても印象的でした。必ず復興しますから応援してください、といわれその6年後にもう一度岩手県の田老、見事に復活した三陸鉄道北リアス線、南リアス線、それから浄土ヶ浜、奇跡の一本松のある陸前高

田、釜石を訪れました。8月夏真っ盛りのはずが東北独特の「やませ」という霧のため震えあがるほど寒かったです。それから、期待したほど復興が進んでいなかったことに気付きました。やはり阪神淡路大震災と異なり広大な土地がやられてしまっていて復興が追い付いていない、ということと道路が繋がっていないためもあるそうです。でも東北の海は、本当にこんな悲惨なことが起こったのか、と思うほどの美しさでした。平成25年はエース田中将大投手が見事25連勝し、東北楽天ゴールデンイーグルスが日本シリーズで読売ジャイアンツを破り、主将の嶋基宏捕手が「見せましょう、東北の底力を」とスピーチしその通りに日本一になった年でした。平成30年には日本病理学会オーケストラ&合唱団の皆

さんで福島県相馬市の体育館でコンサートをさせていただきました。震災応援歌「花は咲く」等の大曲を地元の方々と合唱させていただき、本当に喜んで頂きました。何よりも一番元気を頂いたのは私達の方で、相馬の山中の遠くに海が見える絶景のホテルで、温泉にゆっくり漬らせていただいて未だに多数の人々を捜索なさる警察官と一緒に宿泊させていただきました。平成29年からは同じ兵庫医大卒業の梶本（曲直部）仙子先生と一緒に仕事をさせていただいております。もうそろそろ現実に戻ったら、という先生の声が聞こえてきました。このまま話続けると私の独り言が終わりそうもないのでこのへんでおしまいにします。長々とお付き合い頂きましてありがとうございました。



左下の花束所有者が筆者

開業のご挨拶



辰巳クリニック

院長 辰巳 美晶 (H14卒)

緑西会会員のみなさまこんにちは。平成14年卒業、西宮市笠屋町で辰巳クリニックを開業しております辰巳美晶と申します。経歴ですが兵庫医科大学を卒業後、同大学旧第5内科（後に神経・脳卒中科）に入局、平成20年より独立行政法人国立病院機構刀根山病院、平成22年より市立池田病院、平成28年より西宮協立脳神経外科病院で勤務し、平成30年5月辰巳クリニックを開業しました。出身は奈良ですが大学入学時より20年以上西宮で生活しており、クリニックのある笠屋町は大学の近隣にあります。学生時代お昼休みに一心楼やリスボンに飽きた時にそば源、なるみまで足をのぼして食事に行ったなじみのある街で、みやこ一貫楼の豚肉卵入り付け飯などはよく試験勉強の際に出前してもらいました。小曾根線沿いにはピープルという喫茶店がありよくコーヒーを飲みに行ったことを記憶しております。

みやこ商店街もひと昔前までは有名なタコ焼き屋や、夏祭りなどが賑わいをみせていたとのことですが、みやこ商店街、パルマートミヤコのほとんどの店舗のシャッターがしまり、地域の高齢者が多く利用していたスーパーも先月閉店となりました。その傍らに当クリニックがあるため待ち時間に買い物に行かれていた患者さんもおられ、不便にされて

いる地域住民の声を聞いています。地域活性化の一環としてどこかの大学とコラボして商店街が再興しないものかと思っております。

仕事のことですが開業して1年半が経過しました。継承開業のため準備期間が少なく、レセプト業務など初めてのことに尽くして、電子カルテを導入し、様々な変更手続きなどに四苦八苦していましたが今となればいい思い出となっております。

現在は神経難病の患者や地域の高齢者を主に診療しており、外来の間に在宅診療を行い、昨年度は2件の看取りをおこないました。勤務医もそうですが在宅医はより患者さん、家族との信頼関係を築いていかなければいけなく、研究会や、緩和ケア研修会などに積極的に参加し日々精進しています。

西宮市医師会にも入会し、ゴルフコンペなどに参加させていただいています。医師会の先生方も兵庫医科大学の先輩、後輩の先生が多く、出身校が同じだと血のつながりの次ぐらの感覚で親しくさせてもらっています。

日本は人生100年時代、超高齢化時代に突入しておりますが、健康な高齢者も多く当クリニック従業員も76歳の方が最近自主定年されましたが、まだ70歳台の方が3人働いていただいております。まだまだ現役で頑張らせていただいておりますが、最近60歳半ばの従業員2名を採用し若返りを図ろうとしております。そういった意味で西宮市の雇用に貢献しているのではないかと自負しております。

この度は投稿する機会を頂き有難うございました。今後ともよろしく申し上げます。



7月21日 緑西オープン杯



大江終身名誉会長と平田教授

谷口 医院

谷口 賢蔵
(S54卒・柔道部補欠)



人呼んで、ミスター “we love H.C.M.”
親子二代・兵庫医大卒！

今津真砂町1-6 **Tel:45-5075**

消化器内科・外科・肛門外科・在宅訪問診療

おぐしクリニック

小串伊知郎
(H2卒・剣道部)



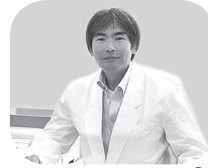
二代目院長・西宮 “道一筋40年”

上大市5丁目12-15 **Tel:57-5531**



内科・肝臓内科・代謝内科

さいとう内科・肝臓クリニック



齋藤 正紀
(S63卒・ラグビー部)
元 兵庫医大肝胆膵科 准教授

C型肝炎の最新治療

—B型肝炎、C型肝炎、肝炎はよろずご相談ください—

仁川町2丁目4-13 **TEL: 54-7771**



まつだ整形外科 クリニック

薬師町8-15 **Tel: 68-5008**

松田 清嗣
(H7卒・ラグビー部)

ボディはボクサー、ハートはイクメン。
水曜日は明和病院で手術を頑張っております！



むとう耳鼻咽喉科クリニック

武藤 俊彦
(H8卒・ラグビー部)



「8周年・見せ(え)る
耳鼻咽喉科」

若草町 1-8-10 **Tel:42-3387**

石本クリニック

麻酔科・ペインクリニック・小児科

石本栄作
(S55卒・ラグビー部)

“緑宝会よりやってきました！”

宝塚市逆瀬川1丁目5-24-301

Tel:0797-74-7166

編集後記

緑西会の皆さん！お元気でお過ごしでしょうか。
レターは、縁起よく第7号を迎えました。

6月・緑西会総会は、石蔵緑樹会会長、阪上病院
院長、そして救急部の平田先生と豪華キャストに
よる御講演、現在の兵庫医大、新病院建設計画、
新時代の緑西と兵庫医大病院のパートナーシップ
について、熱心に意見交換がなされました。7月・

緑西オープンゴルフは好天の下、39名参加の大盛
況となり、一息つくと今度は整形外科の新主任教
授にH3卒の橋俊哉先生が就任との素晴らしい
ニュースが届きました！

さて、来年、TOKYO2020が過ぎると、2022は
兵医50周年がやってきます。引き続き、皆さん、
健康第一でお願いいたします。(濱岡、保科)

兵庫医科大学同窓会緑樹会西宮支部

緑西会会員数 150名

(R1.11.1現在)

緑西LETTER

発行日/令和元年11月22日 発行人/大江与喜子

代表世話人/吉岡 優

印刷所/株式会社小西印刷所